瀧谷山報

令和元年9月18日発行

通巻 162号

発行所
瀧谷不動明王寺
〒584-0058
富田林市彼方（オチカタ）1762
電話 0721-34-0028
振替 00930-5-17704
● 発行人　荒谷純光
● 編集人　荒谷純栄

● 法話「報恩謝徳の生活」その① 山口 真司 師 ―― 2～4頁
● 経典解説 十善戒 ―― 4～5頁
● 春季大祭ご報告／観音まつりご報告／入峯修行ご報告／地蔵盆ご報告 ―― 6頁
● 令和三年 開創千二百年 記念事業ご報告 並ご奉讃お願い ―― 7頁
● 記念事業寄進者御待遇表 ―― 8頁
● 九月二十八日 秋季大祭ご案内／お初穂米お供えのご案内 ―― 9頁
● 七五三詣りのご案内／身代わりどじょう ―― 10頁
● 本堂御宝前 ロウソク献燈のおすすめ ―― 11頁
● 今後の当山行事予定 ―― 12頁

ほとけの「加持」と「人人加持」

最近ニュースで中高年の引きこもりが取り上げられ話題になっています。かつて「引きこもり」は学校でいじめに遭い、また学校になじめず不登校になって自室から出られなくなってしまった学齢期の若者たちをさして言っていました。しかしいま話題になっているのは成人してからの就職の失敗や、就職しても会社になじめず引きこもり、中高年にさしかかった人たちが61万人もいるということで、大きな社会問題となっています。

「いい大人が」と思ってしまいがちですが、現代はたいへんなストレス社会です。職場では常に成果を求められ、少しでもミスをすると落ちこぼれてしまいます。会社に就職しても以前のような終身雇用ではなく、いつリストラされるかわかりません。そのような社会の中では、心休まる場所を見出しがたくなっているのかもしれません。

また今の日本社会は貧富の差の広がりとともに個人主義が強くなり、「自分第一主義」で人を思いやる心が薄くなっているのではと、危惧せざるをえません。このような現状も「引きこもり」を増加させている原因の一つかもしれません。

真言密教では、仏さまが常に私たち衆生を見守っていただいていることを「加持」と言います。さらには、人と人とが縁によってつながり合い、お互いに生かしあっていることを「人人加持」と呼びます。すなわち、私たちは仏さまの大きな慈悲の力の下で生かされていると共に、この世のあらゆる人との縁によっても生かされているのです。

今の日本は、昔に比べてたいへん世知辛い世の中になってきていると感じます。他人への思いやりを感じることも少なくなってきています。だからこそ私たちは、全て洩らさず衆生を救って下さるお不動さまへの信心を深め、決して利己主義に走らず、ご縁のある方をできるだけ大切にして毎日を生きたいものです。

今後の当山行事予定

秋季大祭（九月二十八日）

● 御本尊御開扉大護摩供（本堂）
午前五時・十時・十一時半・午後一時半・三時

● 大般若経転読法要（本堂）　午前十一時半

● 柴燈大護摩供　午後一時　開始予定
午後二時　点火予定

七五三詣り（十月一日～十一月末）二十五日を除く

● 七五三祈祷会（本堂）
午前六時・十時・十一時半・午後一時半・三時

納め不動（十二月二十八日）

● 御本尊御開扉大護摩供（本堂）
午前五時・十時・十一時半・午後一時半・三時

毎日の御護摩奉修時間

午前6時（28日は5時）
午前10時
午前11時30分
午後1時半
午後3時

交通安全祈願

午前9時より午後4時まで
毎時0分／30分の30分毎
（但し、毎月28日は御縁日にて通行禁止となりますので、お車の安全祈願はお勤めできません）

仏具磨きの日のお知らせ

9月25日　10月25日　11月25日　12月25日
この日は仏具を磨く日ですから、昼の御護摩はございません。（朝6時のお勤めはいたしております）

まだまだ暑さが続きますが、朝夕には少しずつ秋の気配が感じられる季節となりました。瀧谷山では、夏の行事が一段落し、例年なら少しばかりの平穏な日々となるところですが、今年は工事の槌音高く、日々進む工事には否が応でも期待が高まります。

今号から、長らく掲載できておりませんでした山口先生のご法話を三回にわたり掲載いたします。「恩」と「縁」について非常にわかりやすくお話をいただいておりますので、ぜひご読ください。

さて、九月二十八日の秋季大祭では、境内で柴燈大護摩供、本堂では大般若経転読法要が勤められます。まだまだ日中は暑い時候ではございますが、皆さまどうぞお誘い合わせの上、ご参拝くださいますようご案内申し上げます。

編集人

法話「報恩謝徳の生活」

平成二十八年四月一八日
その①

埼玉県加須市　總願寺
山口 真司 師

今日は「報恩謝徳の生活」ということでお話させていただきます。「報恩謝徳」というのは恩に報いて感謝をすることですが、今はいろんな悲惨な事件が見受けられます。親が子を殺したり、子が親を殺したりと、とんでもない世界だなと思ってしまうんですが、それはどうしてかと考えると自分がいろんな人にお世話になって、自分の命が生かされているんだということがわからない人が増えてきているのかなと思います。

良いか悪いか別にして、よく若い人が「恩に着せる」ということを言いますけれど、我々年をとった者は、恩に着せたら悪いからあまり言ってはいけないのかなと遠慮しすぎているのかなと思います。〔けれども〕やっぱり私たちも、両親やいろんな人の「業」によって生かされているわけです。私たちも当然、若い人たちにいろいろなことをして、〔それが続いて〕世の中が回っていく。ですから時には「あなたにはこういったことをしてあげたんだから、あなたも次の世代の人たちにしてあげないといけないよ」と教え、伝えていかないといけないと思います。

私の先輩で、仙台の陸奥国分寺というお寺の御住職さんがおられました。その方のお話で、その方が大学に入学して東京に出てきたときに、田舎から出てきて右も左もわからない。バスの乗り方もよくわからなかったそうです。そのバスに乗ってみたらワンマンで、お金を払う時に十円足らなかったそうです。お金は持っていたんだけれど、小銭がなかったそうです。

どうしようと困っていたら、近くに座っていた若い女性が「この十円あげますよ」と言ってくれたそうです。ちょうど同じバス停で降りたので、お礼を言ってお金をお返ししますから連絡先を教えてくださいと言うと、「そのお金はあなたに差し上げます。その代わり次に十円で困っている人がいたら、その十円をあげてください。私はそれで充分です。」と言われたそうです。だからその方はいまでもこの十円のことを覚えていて、何か困っている人がいたら手助けできないかと思っていると言われていました。とてもいい話だなと思って私は今でも心に残しています。

こういったことは私たちはいろんな巡り合わせで生きていますから、恩に着せるんではなく次の人に伝えていく、つなげていくことが大事なんですね。これは物だけではなく、心もそうです。最近はこういったことが希薄になってしまったから、若い人たちがいろいろ悪いことをするのかなと思ってしまいます。

話は変わりますが、古代インドの仏教哲学者の書いたものに「人施設」という書物があります。その中で「世間において得難い二人がいる。先ず恩を施す人。二つに恩を知り、恩に感ずる人」というふうに書かれています。だから先ず恩を施す、その恩に感じる人というのが世の中で一番立派な人だと教えています。私たちは先ず恩を施さないといけないし、恩を感じないといけない、そして感謝しないといけない。

実は「恩を知る人」というのは、パーリ語というサンスクリット語以前に仏教聖典に使われていた言葉でいうと「カタンニュー」といいます。これを直訳すると「なされた事を

知る者」というふうになるそうです。漢字の「恩」という字も、因縁の「因」と「心」からできています。つまり、原因を心にとどめる事を文字にしたものが「恩」という漢字になると思います。

ここで因果のお話をしたいと思いますが、因果といいますと「親の因果が子に報い」という言葉が有名なので、何か怖いもののように思いがちですが、因果の本当の意味というのは「原因があって結果が生じる」という非常に単純なことなんです。そしてその原因と結果の間にあるのが縁ということになります。要するに因縁の縁です。

仏教では、「たとえ雑草の種であっても、良いご縁にさえ触れれば大輪の花を咲かせることができる」として、原因や結果よりも縁を大切にするのが私たち仏教の一つの特色であるわけです。だから、よいご縁を結ぼうといつも考えているというのはとても大切なことだと思います。今日、こうやって皆さんとお会いできているのもご縁です。みなさんのお顔を見ながらつまらない話を聞いてもらっている、非常に申し訳ないことと思うんですが、私にとってはとてもありがたいことと思っております。ですから皆さんもよいご縁を結ぼうと思っていただくと、毎日が楽しくなるのではないかなと思います。しかしながらもちろん縁のなかには良縁も悪縁もあります。あまり悪縁ばかり結んでいるとよろしくないので、なるべく良縁を結ぶようにしてもらいたいなと思います。

さて、それでは次に「報恩謝徳」とは恩に報いるといいましたが、その恩とはどういったものがあるかということをお話したいと思います。仏教で説くことというのは、ほとんどがお経の中に書かれていることです。お経といいますと、一般の方々は葬儀や法事で唱えるものだろうと思われていますが、実はお経というのは非常にたくさんの数があります。ですので法事などでお唱えするのはその中のほんの一部でして、その他のほとんど多くがいかに生きるべきか、どんなに良い人生を送るべきかについて説かれているのが経典ということになります。

そうしたお経の中に「大乗本生心地観経」略して「心地観経」というのがあります。その中に「四恩」という思想が説かれています。これは人は四つの恩によって生かされているという考えです。

このお経を訳された方が「般若三蔵」です。「三蔵」と聞いて皆さん思い浮かべるのは『西遊記』に出てくる「三蔵法師」ですよね。実は「三蔵」という方はたくさんおられます。「三蔵」とは多くのお経を翻訳した和尚さんのことです。簡単にいいますとインドでお釈迦さまがこうおっしゃったとか、こうお考えになられましたというのを書き記したのがお経です。ですから最初はサンスクリット語（梵字）で書かれていました。これが中国に渡って漢訳されました。いま日本に伝わって読まれているものはほとんどが漢字で書かれています。

今日も本堂のお勤めの時に般若心経をお唱えしましたが、この般若心経を漢訳された方が『西遊記』で有名な玄奘三蔵法師です。般若心経だけでなく大般若経という六百巻もある長いお経があるんですが、これを始めとして非常に多くのお経を漢訳されました。玄奘三蔵は中国のお坊さんで、中国からインドに行かれてお経を持ち帰り、漢訳されました。それとは逆にインドから中国にお経を持っ

て行って翻訳された方もおられます。話は戻りますが、「大乗本生心地観経」を訳された方が般若三蔵というお坊さんです。

この『大乗本生心地観経』に説かれている「四恩」という思想ですが、まず一つ目が「父母の恩」です。読んで字のごとく、お父さんとお母さんの恩でございます。私たちは必ず両親がいてこの世に生まれてきています。「自分には親がいない」とか「親の世話になっていない」とか罰あたりなことを言う人がたまにおられますが、仏教では命はたくさんあると説いています。人間の命もそうですし、草木や動物にもみんな命があって、そのたくさんの中からほんの一握りの命が人間として生まれてきたんだとお釈迦さまは説かれています。「あなたは人間以外のものに生まれたかった?」と尋ねると多くの人は「いやあ、人間でよかった」と言われます。私たちは両親からこの世に人間として生まれてこられたというだけで非常にありがたいことなんです。

『父母恩重経』というお経によく説かれているんですが、私たちは生まれてすぐには何も出来ません。目も見えないし食事を摂ることも出来ません。排泄も自分では処理できないので、赤ちゃんのときにほったらかしにされたら死んでしまいます。この世で生きて少しずつ成長していけるのは本当に両親のおかげです。私にも娘が二人おりまして本当に可愛いんですが、どの両親も同じように愛し、〔そして私たちも〕同じように育てられたんだと思います。

では父母の恩とはどれだけあるのかと考えてみると、まず母親というのはお腹の中に子供が宿ると、臨月が近くなってお腹が大きくなるよりも以前に、宿ったのがわかったときから、日常の中で常にお腹をかばうようになります。それぐらい一生懸命お腹の命を守ろうとしているんですね。また産みの苦しみと言いますが、『父母恩重経』にも「出産の時は本当に痛いし、苦しい。でも無事に出産するとその苦しみも忘れて、わが子が無事かどうかをすぐに心配する、子供の事を考える」と書かれています。その後も、お母さんは母乳を飲ませて赤ちゃんを育ててくれます。ではお父さんはどうかというと、一生懸命働いてお母さんにおいしい物を食べさせ、よいお乳が出るようにする。そしてもちろん、妻と子供を守るという大事な役割があります。まだ他にもあるんですが、こういったことが『父母恩重経』には書かれています。　（次号に続く）

●一部、読みやすいよう語尾等の表現を改めています。

経典解説

十善戒

弟子某甲
尽未来際
不殺生　不偸盗
不邪婬　不妄語
不綺語　不悪口
不両舌　不慳貪
不瞋恚　不邪見

『瀧谷山礼拝法則』の解説。前回に引き続き「十善戒」について。

前回、十善戒は、身体（身）・言葉（語）・心（意）の三つの側面から、悪しき行いをしりぞけ、善い行いを実践する構成になっている、と書きました。改めておさらいしておきます。

身……**不殺生　不偸盗　不邪婬**
語……**不妄語　不綺語　不悪口　不両舌**
意……**不慳貪　不瞋恚　不邪見**

前回説明したように、不殺生をはじめとする十の徳目を守って善い習慣を保ち、心身を清らかにしていくことが、この先の修行の基礎となっていきます。

では今回は、これらの善い習慣を実践している偉大な菩薩の姿を通じて、十善戒の具体的な内容を見ていきます。菩薩の修行道を説く代表的な経典『十地経』には、十善戒を完璧に体得し、さらに高みへと進みゆく菩薩の姿が説かれています。この経典は、荒巻典俊先生による流麗な日本語訳が刊行されていますので、参照することにします。まず、不殺生の徳目を体得した菩薩の姿を、『十地経』は次のように描いています。

仏子たちよ、いまや「垢れをはなれた」菩薩の地にあるのであるから、かの菩薩は、すっかり自然なるままに、十種の善なる実践道を体得している。十種とは、すなわち、かの菩薩は、まずはじめには、生きものを殺生することがまったくない。というのは、笞杖をうち捨て、刀剣をうち捨てているのである。闘争心はうちやみ、慚愧することを知り、仁恕の情も生まれている。あらゆる生あるものに恵みあれかし、安らかなれかし、とあわれみぶかく、慈しみぶかい心があるのである。かの菩薩は、あれこれ考えることによってでさえ、生あるものに乱暴することはない。まして、他の生きものを生きものであると知りながら、わざと荒々しく手足をふりあげて乱暴することがあるであろうか。（荒巻典俊『十地経』大乗仏典　八、中央公論社、一九七四年、七〇頁）

ここでは、十善戒を体得しきって、もはや生きものを殺生することがまったくない菩薩の姿が説かれます。「笞杖をうち捨て、刀剣をうち捨てている」という表現は、殺生を徹底的に退けているあり方を端的に示すものと言えましょう。

さらに言えば、ここには、殺生という行為を離れることで起こる心の変化が描写されている、と見ることもできます。生きものを殺生しないことで、菩薩は闘争心に惑わされることなく、さらには「生あるものに恵みあれかし、安らかなれかし、とあわれみぶかく、慈しみぶかい心」が生じていく。そのような心の変化が、ここには描き出されているのではないでしょうか。

私自身の経験を振り返っても、「殺生を避ける」ということが、心にある変化をもたらすことは事実であると思います。殺生禁断の行に入っていた時。暑い夏の夜に、小うるさい虫が枕元に現れても、我慢するか、静かに追い払うかです。ただ、我慢しなければならないと分かっていれば、叩き落とそうとして逃げられる、といういたちごっこから解放されて、考える時間が生まれます。そうすると心の余裕が生まれるのか、いつもは気にも留めない虫の音や姿を観察していると、いつの間にかぐっすりと眠り込んでいたりするものです。経典に説かれる菩薩のような、慈しみ深い心とまではなかなかいきませんが、何がしかの心の余裕をもたらしてくれることは事実だろうと思います。

このように、先の分類では不殺生は身体の行為における徳目として分類されていましたが、その実践は、単なる身体的行為に留まらず、心のあり方にまで広がっていくものであることが分かります。今回もここで紙面が尽きました。続きはまた次回。

五月二十八日　春季大祭 柴燈大護摩供 ご報告

五月二十八日、当山の一年で最大の年祭法要として、大般若転読法要ならびに柴燈大護摩供が厳修されました。

令和最初の年祭法要となった今回は、残念ながら天候に恵まれず、市内一帯は早朝から雨天。午前十一時半の大般若転読法要の最中でも、堂内に大きな雨音が聞こえるほどで、あまりの降雨に参道の露店もまばらとなり、柴燈大護摩供の実施も一旦は危ぶまれました。

ところが午後、柴燈大護摩供の法要が始まると雨降はぴたりと止み、今とばかりに点火された護摩壇からはもうもうと白煙が上がり、たちまち大きな炎となって燃え上がりました。あまりの出来事に、道場内・参拝の方々も皆思わず手を合わせ、一心に火中のお不動様に向かって祈りを込められました。

皆様からお申し込みいただいた護摩木は、修験者たちによってすべて火中に投じられて祈願され、今回の柴燈大護摩供も無魔成満となりました。

火中に護摩木を投じる修験者

七月十八日 観世音まつり ご報告

七月十八日、年に一回の廻向法要として「観世音夏まつり」が勤められました。

当日、観音総拝所には、皆様からご廻向のお申し込みをいただいたご戒名を、一体一体経木に書き写してお供え。午後一時からの施餓鬼廻向法要では、経木が一体ずつ読み上げられていく中、お参りの皆様にご焼香いただき、ご先祖様のお徳を偲んでいただきました。法要後、廻向をお申し込みの皆様には福引を楽しんでいただきました。

七月二十日 大峰山入峯修行 ご報告

瀧峰大護摩講は、創立以来約六十年を数える当山直属の修験講社であり、現在でも毎月勉強会を実施し、研鑽を積んでいます。この日、毎年恒例の大峰山入峯修行が実施され、約二十名の行者が大峰山に登拝しました。

八月二十四日 地蔵盆 ご報告

八月二十四日、地蔵盆のお勤めが行われました。

お勤め前には、お地蔵様の頭巾と前掛けが衣替えされ、新しい装いとなられたお地蔵様を前に、ご信徒皆様のお子様の健やかな成長を祈念しました。お供えをいただいた家庭のお子様には、お下がりのお菓子をお配りしました。

また、近隣の瀧谷・不動ヶ丘・大野台地区の地蔵盆には、当山から僧侶が出仕。各地区のお子様のご健勝を祈ってお勤めいたしました。

総事業費十二億円 客殿棟・寺務棟新築

令和三年 開創一千二百年 記念事業ご報告 並 ご奉讃お願い

当山は平安時代　弘仁十二年（西暦八百二十一年）弘法大師の開基と伝えられ、令和三年は開創一千二百年に正当いたします。

この勝縁に際し、令和三年五月に開創一千二百年祝祷法要を奉修する予定であります。またこの法要の記念事業として、客殿棟と寺務棟の新築工事を実施しております。

この事業は、災害対策に限界のあった旧来の木造建築を更新する必要から、総事業費十二億円、九百坪近くの新築工事となります。当山にとりまして乾坤一擲の大事業でありますが、開創一千二百年という節目に臨み、新たな時代を迎える当山にとってまことに相応しい事業であると考え、この発願をした次第であります。

ご案内しておりますように、昨年末、第一期工事の寺務棟の建設が完了。目下、第二期工事の客殿棟の建設が進んでおります。現在、基礎の構築が進行しており、全体としては令和二年春の完成を見込んでおります。

当事業には、かねてより多くの方々からご奉讃を賜り、厚く御礼申し上げます。ご奉賛いただいた方には、別項に掲載の規定によってご芳名を顕彰し、末永く寺録に留めて祈願いたします。御信徒の皆様におかれましては、お不動様のご威徳を新たな時代に伝えていくため、今後ともさらなるご信援を賜りたく、謹んでお願い申し上げます。

瀧谷不動明王寺

客殿棟 建設現場の様子

完成予想図

記念事業寄進者御待遇表

一万円以上	山報に御芳名を掲載いたします。					
三万円以上	同右	御芳名簿に記入して客殿仏間に納め、永く家門繁栄を祈念いたします。	同右	同右	同右	同右
五万円以上	同右	同右	同右	同右	同右	同右
十万円以上	同右	同右	同右	同右	同右	同右
三十万円以上	同右	同右	同右	同右	同右	同右
五十万円以上	同右	同右	同右	同右	同右	同右
百万円以上	同右	同右	同右	同右	同右	同右

九月二十八日　秋季大祭
大般若経転読付大護摩供　柴燈大護摩供

来たる九月二十八日、秋季大祭として大般若経転読付大護摩供ならびに柴燈大護摩供が厳修されます。

本堂では午前十一時半の大護摩供に際し、大般若転読法要が勤められます。『大般若経』六百巻を作法に則って転読し、世界平和・国土安穏・五穀豊穣等を祈念し、併せて御参詣皆様のお願い事をご祈念いたします。

午後一時頃より、境内にて瀧峰大護摩講所属の修験者によって柴燈大護摩供が勤められます。柴燈大護摩供では、皆様にお願い事を書いていただいた添え護摩木を火中に投じ、所願成就を祈念いたします。添え護摩木の申込は、当日朝より受付しております。

まだまだ日中は暑く、厳しい時候ではありますが、皆様どうぞご参拝くださり、ご利益をいただかれますよう、ご案内申し上げます。

柴燈大護摩供の様子

●柴燈大護摩供 添え護摩木
一本 三百円

●午前五時
御本尊御開帳大護摩供
●午前十一時半
大般若経転読付大護摩供
●午後一時頃
柴燈大護摩供点火

お初穂米お供えのご案内

今年もお初穂（はつほ）米のお供えをご案内する時候となりました。

初穂とは、今年の実りに感謝し、来年の豊穣を祈念して神仏に捧げるお供えのことで、当山ではお米（初穂米）またはお金（初穂料）にてお供えいただいております。

ご奉納いただいたお初穂米は、来年節分過ぎまでお不動様の御宝前にお供えし、来年の豊作を祈念いたします。その後は毎日のお護摩祈祷でお不動様にお供えし、御信徒各家の家門繁栄、家運長久を重ねてお祈りいたします。

お供えされる方は、この山報と同封のビニール袋にお初穂米（料）を入れてお供えいただき、お不動様とご縁を深められますようご案内申し上げます。

●受付期間
九月～十二月末

お初穂米のお供え

七五三詣りのご案内（十月一日～十一月末）

瀧谷山では、十月一日より十一月末まで、七五三のご祈祷をお勤めしております。

子供の健やかな成長を祝い、無事を願う七五三は、公家や武家で行われた男女三歳の「髪置（かみおき）」、男児五歳の「袴着（はかまぎ）」、女児七歳の「帯解（おびとき）」などの儀礼に由来し、江戸時代ごろより七五三として一般的に広まっていったようであります。

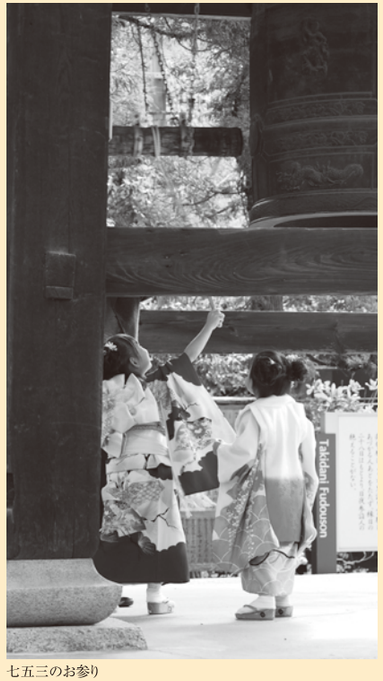
七五三のご祈祷をお受けのお子様には、絵馬と縁起物の千歳飴のお下がりをお渡ししております。

皆様方のお子様、お孫様の七五三をお祝いされ、お不動様のご加護をいただかれますよう、ご案内申し上げます。

●祈祷時刻
午前六時・十時・十一時半
午後一時半・三時

●祈祷料
五千円より

●お下がり
お札・身代守・絵馬・
千歳飴・おもちゃ



七五三のお参り

身代わりどじょう

瀧谷山には「身代わりどじょう」の信仰が伝えられています。当山のお不動様は古来より、特に眼病に御霊験あらたかと伝えられ、多くの人々が参詣に訪れました。そしてお不動様に目を助けてもらおうとお願いする際には、どじょうを滝谷の川に放してお不動様にお願いすれば、このどじょうの目が自分の目に代わって身代わりとなり、自分の目を助けてもらえると伝えられています。

この信仰は今も生きていて、滝行場には近在の方がどじょうを用意してくれており、ご縁日の二十八日などには、これを川に放ち、祈願を込めて行かれる人も大勢おられます。近年では、眼病平癒に限らず色々なお願いでも、どじょうを放つ方が多いようです。

仏教では、「放生（ほうじょう）」という言葉があり、功徳を積むために生きものを放ちやることを意味します。日本では、はるか飛鳥時代のころから行われたようで、それが身代わりどじょうとして、今に伝わっているのかもしれません。

言い伝えでは、この川に放たれたどじょうはみんな片方の目が失明して白くなっている。それは、お不動様がどじょうの姿となって、自らの片方の目を捨てて身代わりになってくれるからだと言われます。

昭和十年ごろ、当山へ立ち寄られたお坊さんがこの事を調べてみたところ、本当にその通りであったので、一同大変感心されたそうです。その時、お不動様はどなたの目を助けられたのか、まことに不思議なご縁という他はありません。

身代わりどじょうの放生

本堂御宝前 ロウソク献燈のおすすめ

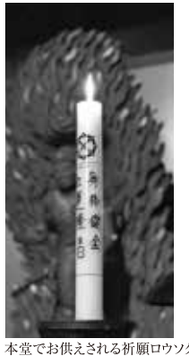
瀧谷山では、御信徒の皆様にお供えいただいたロウソクを、お不動様の御宝前にお燈明として毎日欠かさずお供えしています。

燈明は、古来仏様への最も大切なお供えの一つとされ、現世・来世にわたる大きなご利益があるとともに、その火は仏の智慧の火となり、私たちの心を照らし、闇を払って真実のあり方を見せてくださると言われています。

ロウソクには、お名前とお願い事をお書きいただき、お不動様の御宝前にお供えして祈願いたします。お不動様とさらなるご縁を結び、大きなご利益をいただかれますよう、ロウソクの献燈をおすすめいたします。

●ロウソク大　二千円
　　小　五百円

●受付　当山御膳場


本堂でお供えされる祈願ロウソク

開創一千二百年記念事業 寄進者御芳名（敬称略・順不同）

令和元年七月以降にご寄進いただいた方の御芳名は、次号以降に掲載いたします。

大阪市	藤井寺市
岸和田市	藤井寺市
堺市	藤井寺市
シンガポール	藤井寺市
堺市	広島県
東大阪市	羽曳野市
奈良県	
羽曳野市	
奈良県	
奈良県	
堺市	富田林市
羽曳野市	富田林市
南河内郡	東京都
大阪市	堺市
堺市	堺市
富田林市	泉大津市
羽曳野市	八尾市
枚方市	大阪狭山市
松原市	岸和田市
堺市	河内長野市
藤井寺市	藤井寺市
河内長野市	
和泉市	
堺市	
羽曳野市	
和歌山県	
松原市	
岐阜県	
大阪市	
堺市	
藤井寺市	
大阪市	
高石市	
堺市	
羽曳野市	
大阪市	
東京都	
河内長野市	
羽曳野市	
柏原市	
泉大津市	
泉大津市	
八尾市	
大阪市	
藤井寺市	
富田林市	
大阪市	
堺市	